
こわれちゃえばいいんだ。

ひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こわれちゃえぱいいんだ。

【Zコード】

N1161P

【作者名】

ひろ

【あらすじ】

世界が壊れるまあと

一週間 生き残れる人物はたつたの一人

まあ コロシアエ

愛する者でさえ コロスノダ

そうじやなきや あなたはシヌノダカラ

例えば君の妹が自分をコロソウと考えていたのなら
あなたはどうしますか？

もしもの願いせきみがしむ」と（前書き）

この話は、是非ファイクションでいて欲しい。
でも、ノンファイクションになるかもしれない。
そんな物語です。
グロい表現もあります。
心してかかる下さい。

もしもの願いはきみがしぬこと

第一物語「もしもの願いはきみがしぬこと」

世界が腐り始めたのは、ほんの何年か前の話で。別に何千年も前からだつたわけじゃない。だつて十七歳である俺が覚えている程の何年か前の話なんだから。テレビで放送してたのだつてちゃんと覚えてる。その時隣にいた女の名前は何だつたかな。そつちのことは覚えてないや。まあ、いつか。

話がずれた、世界が腐り始めた話だつけ？ 簡単なことだよ。この地球が一週間後壊れるつて話さ。原因は何だつたか忘れたけれど、そんなの人間が勝手に二酸化炭素だの、人工物だの、地球を壊すようなことをしたからだろ。そんなの誰だつて気付いても可笑しくない。でも、そんなのはどうだつて良かつた。大事なのはその後の話だ。それを聞いた瞬間、誰だつて絶望した。それこそ、楽に死んだ方がいいと考えるくらいにね。でも、その後に言われた言葉が世界を腐らせたんだよ。俺はそう思つ。

ここに一つ、地球から脱出出来る宇宙船が一つだけある。これは素人でも簡単に動かせる、いわば旅行用のものだ。開発中で、現在使えるものはこれしかない。もし、これを手に入れたければ……
世界に散つた五つの鍵を、探し出せ

世界へ放送されたこの映像は絶望から希望へと導くものへとなつた。だがしかし、絶望はまたやつてきた。五つの鍵を見つけるためには世界を回るのが必須の条件である。そのためには金が必要だ。人間誰だつて一番可愛いのは自分だ。俺だつてそう。だから、昔、隣にいた女が一体誰だつたか、名前は何だつたか、顔はどんなやつでどんな性格だつたのかなんて覚えていない。大事なのはそいつがお金をどれだけ持つっていて、どれだけ間抜けで、どれだけ俺に死く

してくれるのかだ。

俺は略奪者だ。それこそ、俺は自分が生き残るためなら人殺しだつて出来る。この映像が流れてから、警察はまともに動かない。政府は何もしない。一週間という期日はあまりに短い。地球が壊れるまでの時間を自分のために使いたいと考えるのは警察だろうと、政府の人間だろうと同じだ。それこそ、俺たち略奪者のように。

世界が変わったのは地球が壊れるから？ いや、違う。この、今、狂っている世界こそ、本来の姿だ。何千年も昔は、生きるために、自分の権力のために人殺しだつて戦争だつて起こしたのだから。現在も同じ。生きるためにどうやって相手を騙し、どうやって金を手に入れ、どうやって鍵の情報を手に入れるのか……

俺にとつてはほんのゲームにすぎないけどね。

*

「おい、カイル。何ぼーっとしてんだよ」

「わりいわりい」

カイルと呼ばれた青年は自分を呼んだ人物の方へと顔を向け、愛想笑いをする。暗い物置らしきこの空間にはカイルとカイルを呼んだ青年、ピオラしかいない。一人はダンボール箱のようなものに腰掛け、このほこりまみれの倉庫の中にひつそりと過ごしていた。電気は無い。薄暗い光は、この倉庫から出るための唯一の手段である扉から差し込むわずかな光と、この倉庫に置かれていた蝋燭が灯す小さな光だけだ。

ピオラはカイルの表情が読めたわけでは無いだろうが、声の調子から、この相棒は機嫌が良いと悟る。

「何だ。今日は随分と機嫌が良さそうだな」

ため息混じりに言うピオラに、カイルはにっこりと笑う。微かな灯火に映るカイルの顔は、かなり不気味であったが、それさえも慣れた空間であるのか、ピオラは驚きもせず、むしろ嬉しそうに口元に笑みを浮かべる。

被っていた黒い帽子をピオラに投げつけ、そこから現れた明るいオレンジ色の髪をぐしゃぐしゃとかく。受け取った黒い帽子を手でもて遊び、はは、と笑うピオラ。

「そら、機嫌はいいわな。強盗成功。十人もやつて来たもんな」けらけら笑うピオラに相変わらず不気味な笑顔を浮かべるカイル。その顔には赤い血がべつとりと着いている。それがカイルの血では無いことに、ピオラはもちろん気付いていた。それだけ相棒を信用し、そして恐ろしいと、思つているのだから。

ピオラの言葉に頷き、カイルは床に落ちている戦利品の中から骨付き肉を取りだし、かみ碎く。それこそ、百獣の王の様に。ピオラもその中から酒を取り出し、飲む、飲む、飲む。

「強盗成功はそりやあ嬉しいさ。それに、今日はニイに会えるからな」

「ああ、エルニイな」

無邪気な子どものように言うカイルに、ピオラは笑いながら納得するように言葉を返した。だが、暗い中での表情は、言葉のみのキヤツチとなる。ピオラの表情は暗く、落ち込んだものであるのに、カイルは気付かない。いや、もしかしたら気付いていたのかもしれない。ただ、何も言わなかつただだけで。

「楽しみだよ。だつて、俺の“恋人”だからさ」

一人はいわばチンピラである。強盗、窃盗、殺人……生きるために何でもするような奴らだ。カイルとピオラは子どものころからの付き合いで、いわば幼なじみというべき存在である。途中学校は別々になつたりもするが、また再会したりと、随分縁が深い仲である。

る。

「この二人がチンピラへと成り果てたのはそれこそこの世界の変化からと言つても良かつたが、カイルは少し違つと言わざるを得ない。子どもの頃から手癖が悪かつたのか、万引きを多々起こし、喧嘩も派手にしていた。女遊びも好きで、付き合つてはたかり、付き合つては捨て……そんな生活を続けていた。だが、それでもカイルは満たされなかつた。もつと刺激が欲しい。もつと、もつと、求めた。

その時にニュースは放送された。

どのチャンネルに回してもそのニュースしかやつていない。「世界は一週間後、壊れる」という馬鹿げたニュースだ。だが、カイルにはそれだけで十分だつた。

一週間という期間はあまりにも短い。周りの大人们は、自分を守るのに精一杯。子どもはどんどん捨てられてはいた。そんな奴らを集め、ギャング団を作つた。大人達を思い知らせる。自分を第一に優先しろ。もし、このギャング団に入りたければ“両親をコロシテコイ”。

瞬く間にこのギャング団は大きくなつていいく。このニュースはそれほどに絶大な力だつた。もし、一週間しかないなら、構わない。自分を捨てた親なんて“シンデシマエバイインダ”。そんな考えの子どもはたくさんいたからだ。

カイルはニュースが放送された次の日の早朝、すでに真っ赤に染まつていた。

そのうちの一人であるエルニイは二歳年下の少女で可愛らしいといつのが第一印象の大人しい少女だ。捨てられていた少女は、ギャング団の噂を聞き、この中に入った。カイルに「両親は川に捨ててきました」と、綺麗な笑みを浮かべて。カイルは楽しかつた。自分の言葉で“たくさんの人物の運命が断ち切られている”といつこの状況が。

そして、エルニイは速攻で告白してきた。もちろんカイルはすぐ了解した。こんなのだなのだから。

笑つて無邪気に言つた相棒に、ピオラは大きなため息を吐き、良かったな、と返しておく。そして、ピオラは知つていた。カイルの異常までに執着した非日常がどれだけ危険で、どれだけ人の運命を狂わせるかを。だが、ピオラは何も言えなかつた。それこそ彼も非日常が好きで、一週間という期限付きの非日常は、とてもおいしいものだつたからだ。そして、今日は一週間という期限が迫る三日前の早朝だつた。

飲み干してしまつた瓶を投げ捨て、立ち上がる。向かうはカイルの恋人、エルニイと非日常欲しさに両親の運命を断ち切らせた子ども達の元。カイルは笑う。無邪気に。ピオラも笑う。後悔に。

*

今日は三回目の集会の日だ。普段は自由に窃盗、強盗などをやらかしている彼らが集まる日。それはこの世界が崩壊する三日前といふのも理由のうちだが、今日はもう一つの理由があつた。カイルとピオラしか知らない、サブプレゼンテーション。

広い工場跡で行われる集会はざつと三百人ほど集まつているように見受けられる。上の柵から見下るすように立つてゐるカイルはその集まりように笑みを浮かべた。ピオラはただ、離れた場所でカイルを見守り、この人数の多さに、今日も後悔の念を抱く。

無邪気な笑顔を浮かべ、カイルは乗り出すように柵に捕まつた後、“恋人”の名前を呼ぶ。呼ばれたエルニイは上擦つた声で返事をした後、近くの階段から駆け上がり、カイルの横へと立つ。呼ばれた子ども達は、見せつけか何かをするのか、はたまた惚氣話でもするのかと、苦笑を浮かべながら“リーダー”を見つめている。

「久しぶり。二イ」

「お久しぶりです。カイル」

笑顔で挨拶するカイルに紅潮した顔を隠すように俯き、エル二イは返す。耳まで真っ赤のエル二イの様子にカイルは笑いながら、エル二イから田線を外し、たくさんの子ども達を見つめる。いつもならエル二イを抱きしめたり、キスをしたり、実に“恋人らしいふり”をするのだが、今日はそのような前触れもなく、子ども達に話しかける。

「なあ、みんな。今日は話を聞いて欲しい。大事な話だ」

そのような唐突な“リーダー”の言葉に辺りはざわめき始める。だが、そんなざわめきでさえ、まるで効果音のように受け入れ、カイルは話し始める。エル二イはいつもと違うカイルに俯いていた顔を上げ、その横顔を見つめた。ピオラはそんなエル二イの姿を見つめていた。

「約束つてのは守る必要がある。そう思うだろ？」

唐突だった。あまりの唐突さに、辺りの効果音が消し去られてしまつほどに。そんな子ども達に、カイルは笑う。

「さて、その約束が破られていたとしたら、みんなはどうする？」誰も何も言わなかつた。ただ、カイルの言葉に耳を傾けるのみだ。『俺はやつぱり許せないなー殺してもいいよね？』

につこりと笑う姿は無邪氣で。

「じゃあ、エル二イ。君に頼もつかな

「え……？」

いきなり振られたエル二イ。そのことに驚いたわけではない。カイルは一度も、そう一度も、エル二イと呼んだことが無かつたのだ。だが、彼は今、二イと愛称では無く、確かにエル二イと呼んだのだ。とまどい、立ちつくしてしまつたエル二イにまた、につこりと笑みを浮かべ、今度はエル二イを見つめて呴いた。声は小さいが、倉庫の中は不気味にカイルの声を全体へと響き渡らせた。

「だから、約束を破つたお馬鹿さんを、殺して欲しいんだ」

今度はわかりやすく、ゆっくり、丁寧に。そんな言葉が似合つしやべり方でエルニイに話しかける。エルニイは固まる。身体が動かない。そう、それこそ催眠術にかかってしまったかのような、そのような錯覚。

「もしもね、もしも俺の願いが叶うなら。その願いはきみがしぬこと」

そんなカイルの声は不気味に、だが平坦に倉庫に響いた。エルニイは身体を震わせ、真っ青にした顔を横に振り、やつと動き始めた身体を後ろへ、後ろへと、カイルから逃げるようになに動かす。カイルは何も言わない。追いかけることもしない。ただ、エルニイを見つめて笑っていた。

子ども達はこのやりとりを理解していない。彼女が何の約束を破つたのかが分からぬからだ。

「ああ、そう言えばみんなにエルニイが破つた約束の内容、教えてなかつたね」

びっくりと、身体を震わせたエルニイに今度は全く何もない、無表情の顔で、語りかける。

「きみは両親を口ロシテナイ」

「……！」

「きみは両親に盗んだ物を全て渡してたね」

「そ、それ、は」

「これは約束を破つたつてことだろ？」

「あ、あ、あ……あ、あああああ……！」

「じゃあさー俺の言つこと聞けよ、助けてやる」

そう言つてまた微笑んだカイルに、エルニイは助けを求める様に、ただ、うなづき、ただ、すがりついた。

しね

だが、カイルから呴かれた二言は、エルニーを絶望へと追いやる。いつの間にか手に握られた拳銃をエルニーに撃ち込み、あの世へと追いやつた。その顔には笑みが浮かべられ、そして顔には血がはね、彼女は血溜まりへと墮ちていった。

一度と戻ることの出来ない、奈落の血溜まりへと、墮ちていったのだ。

結論したエリックが、エリックは奪うこと止めない。エリックはどの腕なら、一発で死んでいるはずで、それに気付いているはずだが、彼は撃つことを止めない。

鳴り響く音は途中でとぎれる。彼は球が切れるまで、彼女の身体に撃ち続けた。そして、笑い続けた。

笑う笑う、無邪氣に笑う。見るも無惨になつた“恋人”を見つめ、
彼は笑い続けた。

子ども達に視線を向け、何かいたずらを思いついた子どものように、笑い扉へと指を指す。その先は外だ。腐った世界だ。

なやり方で

彼は狂っている。だが、子ども達も狂っていた。先ほどまで仲間だったた彼女を忘れ、ただリーダーの言葉を聞き、この扉から走つて外へと出る。全員が消えてしまえば、残つたのは死体と、カイルと、ピオラ。ピオラは静かに立ちつくす。相変わらずの興奮状態のカイルに近づけば、自分が殺されることを、ピオラは知つていたからだ。だが、死体を近くに置いておけばそのうち彼は食べてしまうのではないか、人間では無くなつてしまふのではないかと、ピオラはいつも恐れていた。

「大丈夫だよ。今日は随分と落ち着いてるからさ」

ピオラの心情をまるで読んだかのようすにカイルは笑いかける。血まみれのカイルに眉を顰め、肩をすくめる。死体となつた“友人の恋人”に目を向け、カイルに聞く。

「いつ気付いたんだ？」

「え？　さいしょっから」

無邪気にいう友人にはもう、すでに恐ろしさしか感じない。だが、この青年が元々狂っていたとはいえ、彼が人殺しをするまでには行かなかつたはずだつた。一週間という制約は、彼をここまで変えた。それこそ人ではなくなつてしまつたかと錯覚するほどに。

*

世界が壊れた理由なんて俺にはどうだつていいいんだ。でも、でもさ。人は自由に生きるために何だつて出来ると思うんだ。俺がその一例だね。それに、この世界は腐つてゐるから、俺が腐ろうとも世界は何とも思わないさ。君もそう思うだろ？

俺は自分が狂つてゐるなんて思つちゃいない。だつて、殺さなきや殺される。それは事実だし。両親に捨てられて憎しみが湧いたのは事実だし。それがちょっと度が過ぎてゐるだけ。

喜びつてのは人それぞれ違うけど、それが欲しいと思う欲は誰だつて同じだろ？　俺はただそれが変わつてゐるだけ。

世界は壊れた。

後の三日間を彼がどのように過ごしたかは、彼と、その友人にしか分からぬ。

第一物語「もしもの願いはきみがしむ」と

完

もしもの願いはきみがしむこと（後書き）

この小説はほかの掲示板にて連載していた物を転載したものです。

わたしとあなたとすべてひとみなら

第一物語「わたしとあなたとすべてひとみなら
世界が壊れたと、私のマスターは言っていた。あざけ笑うかのよ

うに言ったマスター。私はその瞳を初めて“恐ろしい”と感じた。
マスターはどこかの会社の社長でお金がたくさんあって、そして
たくさん別荘があつて、たくさん車がある。私にはそのたくさん持
つている意味、そして理由、価値、すべてを理解することは難しい
が、それを見た人物は羨ましそうにしていたのを覚えている。

世界が壊れたのなら、この全てに意味は無いのではないか、私は
そう考えていたけれど、マスターの生活に変わりはない。普段と変
わらず、いつも通りに過ごしている。あまりにも普通すぎて、マス
ターが言っていた“世界が壊れた”という話が嘘みたいだ。でも、
これが事実だと、私は理解をしていた。

私はアンドロイドだ。

プログラムされた物ならなんでも理解出来た。この、世界が壊れ
たという事実も、マスターの言葉だからこそ理解した。

私に初めてプログラミングされたのは“マスターの言葉を理解し
ろ”だったから。

私に心は必要ない。

心つて何？ 私には分からぬ。ああ、必要ない。だから、知る
必要はないのだ。

*

「お前は私に何か用か」

黒縁眼鏡にスース。 そんなきつちつとした姿で男は現れた。こ

こは田辺厳蔵が所有する屋敷の一室だ。客室ではなく、厳蔵本人のプライベートとして使う個人専用の部屋に、その男は現れた。穏和を思わせる笑顔を貼り付け、厳蔵に微笑みかける。黒い短い髪は窓からこぼれる風にあおられていた。

厳蔵はやたら豪華なソファーに腰掛けたままその男を見つめる。隣には黒い女物のスーツに身を包んだ女性が立っている。彼女の瞳は男を捕らえ、何も言わずにただ、立っていた。

「初めてまして、田辺さん。私はあなたに、どーしても会いたかったものですから」

砕けた口調より若干固い口調と言った調子で話し始めた男は相変わらず笑顔を浮かべている。扉の近くに立っていた男はかつかつと、大理石の床を叩きつけ、厳蔵の元へと歩み寄る。女性は相変わらず、無表情で男の様子を探り、厳蔵は男に負けない笑顔を浮かべる。

暗い一室。三人の周りに流れる空気は、そんな一室にあつた暗さである。一人一人、自分以外が何を考えているのか、探しを入れる。男は厳蔵の目の前にあるソファーの前で歩みを止めた。口元には相変わらずの笑みを貼り付けたまま。

「厳蔵さんはこの世界が壊れたと言つていたじゃないですか。うん。私もそう思うわけとして。あなたの技術だつたらこの世界から逃げ出せるのに、なーんで逃げださねえんだー何て思つたりして」

そう笑つた男の視線は女性に向けられる。女性は相変わらず無表情で男を見つめたが、男が女性に今まで貼り付けていた笑みとは違う笑みを浮かべると、女性は微かに……微かに眉を顰めた。

厳蔵は笑つた。

「つは、まさかと思えばそんなことか。出て行け。私の考えは変わらん。そして、死ぬ気もない」

「……あらそーですか。分かりました。じゃあやつぱりあんたとは相容れぬ仲だと、言つわけッスね？　ああ、何かこれ聞いたら安心したです」

どんどん敬語が崩れる男に、厳蔵は何も言わず睨み付ける。男は

相変わらずへらへらした調子で笑う。そして、踵を返し、手をひらひらと振る。足音を踏みならしながら。

「そうそう。あなたのことをギャング団が探してましたよー？」 気

を付けて下さいね。彼らには気品の欠片も無いッスから

男はドアノブに手をかけ、その場から立ち去つた。厳蔵は扉を睨み付けたまま、女性に声を掛ける。

「あの男を見張れ。いいな」

「……了解しました、マスター」

女性は綺麗な日本語で呟いた。

「綺麗な女の子が私に何か用かなあ？」

男は厳蔵の敷地内を相変わらずふらふらしていた。女性が見張つていたのに気付いたのか、男は立ち止まり、振り返りながら女性に問いかけた。女性は隠れることもせず、男の前に立つ。

女性は綺麗なブロンドの髪をしていた。さらさらと流れる髪は空からくる太陽の光に反射し、綺麗な金色へと輝きを増す。その光が敷地内の花を輝かせ、まるで女神か天女のようにそこに在つた。瞳は空のように青く、澄んでいた。だが、男は本物の空を知らない。本物の太陽の光を知らない。全てが偽物で、全てが偽造物だつたから。

相変わらず無表情の女性に男は笑いかける。

「うーん。君、アンドロイド？ なら、マスターから私を見張れとの命令をされたのですかね？ ならなら、私についてくる感じといふこととよろしいでしょうか？」

一気に捲し立てた男に、やはり微かに表情を変えたが、すぐに元の無表情に戻り、女性は、はい、とだけ返した。アンドロイドは人間に盾つくことを許されていない。だからこそ彼女は、人間である彼の質問に素直に答えた。

男はふんわりと微笑んで、数歩離れていた女性の目の前へと近づ

き、のぞき込むように彼女を見る。だが、彼女は動かない。

「えと、名前なんて言つのですか？ 呼べないですか？」

そんな無邪気、という言葉が似合う調子で聞いてきた男にやはりまた微かに表情を歪め、ないです、彼女は咳く。すると今度は男が大きく眉を顰め、腕を組んだ。そしてうなり声を上げ、首を傾げた。そんな様子の男を見て、女性は微かに口元を緩める。

「名前、ないだ、と。あの親父は何て呼んでいるんですか？」

女性は親父、と言うのがマスターだと判断し、咳く。

「呼ばれることはありません。私が勝手に認識します」

たんたんと答えた女性に、男はそうか、と微笑み、そして彼女の肩を掴んだ。

「なら、君のことを見た勝手にミレイと呼ぶことにしましょうか」
みれい、男は彼女に名前を与えた。ミレイは目を見開き、驚いた表情をする。アンドロイドに名前が出来た。そして、自問自答する。私は驚くことができたのだろうか。いや、これは私が驚いているとということだろうか。心とは何なのだろうか。この人は一体。

「私は灰杜。よろしくお願ひしますよ。ミレイ」

*

灰杜は一目見た時からミレイに恋に落ちていた。巖藏が自分自身をつけるように命令したと聞いた時は心があのどつたものだ。彼女は反則的に美しかつた。作り物だということは関係なかつた。彼女の美しさは本物で、灰杜の心を捕らえたのだ。

だが、灰杜はうすうす気付いていた。彼女に心がないと言つこと。そして、巖藏の言つことを何より聞くこと。それを知つていた。だから、少しずつ、少しずつ彼女に心を作ろうと考えた。だから、あえて大きく表情を表現した。身体で、顔で、全体で。微かにだが、

彼女の表情に変化が表れたのをもちろん灰杜は気付いていた。そして確信する。彼女はきっと、心を持つことが出来る。

ミレイが灰杜を見張り三日が経つた。ミレイは灰杜のころころ変わった表情に、見惚れ、そして、不思議な感情へと溺れていた。感情などと言つるのはおかしな物であるがそつとしか言いようがないこの不思議なプログラム。

そしてミレイは気付いていた。この男はマスターの敵であると言うこと。排除しなくてはならない対象であると言つこと。マスターがこの世界から逃げ出すためには、この男を殺さなくてはならないということ。だが、ミレイにはそれがどうしても出来なかつた。何故だかは分からぬ。理屈ではないことをミレイは知つていた。

庭を一人で歩く。ミレイに心が現れはじめたと気付いているのは灰杜だけだ。花がこんなにも綺麗で、海がこんなにも大きくて……全てはいらない感情だつたはずだつた。だが、ミレイは知つてしまつた。全て、わたしが生きるために気付きたかつたプログラムだということを。

「ミレイ。これが綺麗という物ですよ。忘れないで下さい」
いつもそうやって灰杜はミレイに伝える。ミレイはうなずき、どこかにあるプログラムが無意識に綺麗だと知らせる。

灰杜と一緒にいると楽しい。そんな感情が表れたのは一緒にいて二日が経つた時だつた。だが、その日にミレイはマスターに命令される。灰杜を殺せ。意味は理解した。そして眉を顰め、間を開けて答えた。はい、と。その後ミレイは外へと出たがマスターがその後に言つた言葉を聞き入つてしまつた。

「あいつのプログラムを初期化しなくてはならん」
つまり今まで覚えたことを全て忘れるということだ。この綺麗だということも、美しいということも、今知つた、前に灰杜に教えて貰つた悲しいということも、灰杜のことも、全て、全て、全て忘れてしまつ。

嫌だつた。どうしても、隣に歩く灰杜を見る。灰杜は笑いかけてきた。

「ミレイ。私を殺せと、巖藏に言われたつすよね？」

灰杜はやはり察していた。

「泣かないで」

灰杜の言つてこる言葉が、ミレイには理解できなかつた。

「この世界が無くなる三日前。ミレイは巖藏の前に立つていた。灰杜を処理したと、マスターに伝えて。」

「そうか。ありがとな。さて、君を消す」

初期化するということだ。灰杜のことを忘れる。さよなら。さよなら、何で、水が出てくるのだろう。わからない、苦しい、息が出来ない、なんで、わたし、かいとにあいたい、かいと、つて、だれ？わたしは、わたしは……だ、れ？これがますたー？わたしは、ああ、そうだ。

「あなたがマスターですか？」

「そうだ。私の言つことだけをきくのだ」

世界は消えた。彼女が望んだのは、生きたい、たつたそれだけのことだつた。灰杜と共に、生きたかつた。ただ、それだけのことだつた。世界という物は残酷である。愛する者と生きることさえ、許されず。

ミレイと巖藏のその後は、誰にも分からぬ。

第一物語「わたしとあなたとすべてとさよなら」完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1161p/>

こわれちゃえばいいんだ。

2010年11月24日18時10分発行